

早という気がする。また、木舟氏の講義ではゲミンガという強いガンマ線源があるということであったが、これについては何も触れられていない。ゲミンガの観測も確立したものではなかったのだろうか。

第6章「ガンマ線でみた太陽フレア」、第7章「ガンマ線バーストを追って」では、著者自身の太陽フレア、ガンマ線バーストの観測の仕事が具体的に紹介されている。第6章では太陽フレアの物理が詳しく、丁寧に説明されていると同時に、著者の携わってきた、気球や“ひのとり”衛星の観測にまつわる苦勞話が語られていて非常に面白い。第7章では、気球で小規模のガンマ線バーストを観測するという、著者のユニークな仕事を紹介されている。ガンマ線バーストはその起源が今でも謎であるわけだが、データは確実なものなので第5章のような記述の曖昧さは感じない。観測の積み重ねによって少しずつガンマ線バーストの正体に迫っていく様子が興味深い。しかし、“ぎんが”衛星による最新の観測結果については触れられていない。“ぎんが”はガンマ線バーストについていくつかの重要な発見をしているのだが、これらの結果が紹介されていないのは残念である。いずれにしても、この2章には生々しい研究の現場が著者自身の言葉

で語られていて、ノンフィクションとしての面白さがある。第4章、第5章よりもこちらにもっと重点をおいたほうがおもしろい本になったのではないかと思われる。

結局、ガンマ線天文学の現状は、初期のX線天文学の状況とよく似ていて、観測器の精度を上げてデータの質を高めている段階であり、太陽、ガンマ線バースト源以外の天体についてはまだ精密な議論のできる段階ではないという感想を持った。アインシュタイン衛星がX線天文学を飛躍的に進歩させたように、第8章「これからのガンマ線天文学」で紹介されている GRO (Gamma Ray Observatory) が、ガンマ線天文学を確立することを期待しよう。
(海老沢 研)

ビデオ教材その6 パノラマ太陽系

(各20分, 18000円, 製作: NHK, 発売: 内田洋行, 1981年)

『木星——太陽になれなかった巨大惑星』

ボイジャーの撮影した木星像、自転している姿、ボイジャー自身の姿や1号2号の軌道が紹介される。木星の自転と大気の動き、大赤斑(大赤点といっている)にたいて木星の大気が動いている様子、地球の台風は長続

賛助会員名簿

(1988年6月5日現在の本会賛助会員は下記のとおりであります。ここに)
(社名、代表者名を掲載させて頂いて感謝の意を表します。(五十音順))

旭光学工業株式会社	松本 徹	名古屋放送株式会社制作部	乗松 要
朝日新聞社 科学部	武部 俊一	ナルミ商会	村上 俊男
アストロ光学工業株式会社	岩川 毅	(株)西村製作所	西村 晃一
(株)アムテックス	佐藤 邦彦	日本光学工業株式会社	福岡 成忠
岩波書店	緑川 享	日本コントロール	
宇宙開発事業団	山内 正男	システム株式会社	下 光 郎
大阪市立電気科学館	北 澤 淳	(社)日本測量協会	坪川 家恒
沖電気工業株式会社		(財)日本地図センター	高崎 正義
第2営業本部	佐藤 敦之	日本通信機株式会社	川 島 穰
カールツアイス株式会社	ハイツ・シュミット	日本特殊光学	山田 坂一
河出書房新社	清水 勝	(株)ニホン・ミック東京本社	萩村 一美
(株)教育社 Newton 編集室		日本ユニパック株式会社	
国際文献印刷社	笠井 康弘	名古屋支店	黒木 建雄
コダック・ナガセ(株)	澤田 卓也	日本洋書販売配給株式会社	渡辺 正憲
啓文堂 松本印刷	松本 喬	(株)ニュートリノ	山本 義朗
恒星社 厚生閣	佐竹 久男	ネイチャー・ジャパン(株)	David D. Swinbanks
五藤光学研究所	五藤 隆一郎		畫馬 輝夫
コロンビア貿易株式会社	飛田 利一	浜松ホトニクス株式会社	
金光教本部 教庁	金光 鑑太郎	ファコム・ハイタック(株)	
(株)三 五	恒川 稔朗	ファコム本部文教営業部	村林 正昭
スライデックス(株)	尾関 二祐	富士通株式会社	
サンシャインプラネタリウム	々々木 永祐	システム統轄部	小坂 義裕
誠文堂新光社	小川 茂男	丸善株式会社	海老原 熊一
(株)立風書房	下野 博夫	三鷹光器株式会社	中村 義一
地人書館	中田 威夫	三菱電機株式会社	
天文博物館		宇宙衛星通信部	望月 孝則
五島プラネタリウム	五島 昇二	ミノルタカメラ株式会社	田嶋 英雄
東京学術印刷株式会社	船越 昭四	森田 清	
東京電力株式会社	平岩 外一	雄山閣出版株式会社	長坂 一雄
(株)東 芝	青井 舒	(株)渡辺教具製作所	渡辺 哲郎
東北電力株式会社	玉川 敏		